

ヨハネによる福音書 10 章 7-18 節 「飼い主わが主よ」

今日の聖書は二つのことを語っています。一つは「門」について。二つ目は「羊飼い」についてです。イエスさまはまず、「はっきり言っておく。わたしは羊の門である」と語ります。ご自身こそ門であると言うのです。この門とは、9 節にあるように、救いにいたる門のことです。羊たちは、この門を通して出入りすることによって牧草を得ることが出来るのです。主イエス・キリストを通らなければ真の救いに至ることは出来ないというのです。いつの時代も、主イエス・キリストという門を通らないで、救いを得ようとする者に満ちています。人生を豊かに生きるための、ライフスタイルや、人生観に従った生き方があります。それらは、私たちに、「神を信じなくても、楽しく、充実した人生を歩むことが出来る。信仰に生きるということは、堅苦しくめんどくさいことだ」と思わせるのです。そして、お金や、地位、自分の歩みに対する誇り等、様々なものが救いの根拠であるかのように思わせ、そのようなものこそ本当に求めるべきものであると感じさせるのです。そのように、キリストから、私たちを遠ざけようと誘うものは、すべて、ここで言われている「盗人、強盗」なのです。

イエスさまは、そんな私たちに向かって、「わたしが来たのは羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるため」と言われます。その理由が続く11節で示されます。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。主イエスのご自身が門であると共に、「良い羊飼い」でもあると語られたのです。門を通して入って来て、門から出入りするよう導く羊飼いがいて、初めて救われるのです。「雇い人」と「良い羊飼い」の違いは、「羊のために命を捨てる」かどうかということによって決まります。罪と死に直面する時に、体を張ってその危機と立ち向かう、羊の身代わりとなる羊飼いでなければならないのです。イエスさまが、ご自身のことを、このような良い羊飼いであると言うのは、イエスさまが十字架において自らの命を投げ出されることで、羊たちを襲う狼と戦われた方だからです。自らの命を助けるために、良い羊飼いは神の御心に従って歩むのです。ここに羊の命を助けずにはいられない、良い羊飼いの愛が示されているのです。この愛こそ、14-15 節にある「知る」という言葉に現れています。「知る」とは、主なる神さまとイエスさまが深い愛の交わりの中にあるように、互いに結び合っていることです。イエスさまが、私たち一人一人の名を呼んで集めて、私たちがその声を聞く時、イエスさまと私たちは、主なる神とイエスさまとの関係と同じような関係にあるのだと言っておられるのです。良い羊飼いとは、このように父なる神と一体であるものでなくてはなりません。父なる神との愛の交わりの中にある羊飼いに導かれる時に、羊飼いによって命の恵を豊かに受けることになるのです。

主イエスの十字架による救いの業は、キリストの群れの中にいない者のためにもなされたものであり、主イエスは、そのような人々を気にかけておられるのです。そして、様々なものにより頼んで歩んでいる者が、主イエスの声を聞き分けるようになり、一つの群れになるということが見つめられているのです。真の羊飼いの声を聞く人々が、一人の羊飼いの前で悔い改めて救いに与りつつ、一つの群れとなることが出来ますよう、主イエスの声を聴き分けて歩みたいと願います。